

「親鸞と高田の門弟たち」

筑波大学名誉教授 今井雅晴

はじめに

1 親鸞とその念仏と武士社会

(1) 法然の念仏と親鸞の念仏

① 法然の念仏 専修念仏

② 親鸞の念仏 ③ 信心と報謝の念仏 → 新しい武士の社会に適した念仏。

(2) 貴族の社会を超えて発展する武士の社会

① 貴族の社会＝話し合いで決める（公卿の会議）

② 武士の社会＝武力・殺し合いで決める

① 熊谷直実と平敦盛、その父の経盛。悪人正機説。

② 御恩と奉公 主君が家来を信用して領地を守る約束をする。
家来は主君を信頼し、その恩に尽くす。

2 高田の大内氏と菩提寺（如来堂）

(1) 大内氏＝常陸大掾氏（常陸平氏）の一族

(2) 大内氏の菩提寺（のちに専修寺となる）

真仏＝大内氏の一族で、大内氏の菩提寺に勤務していた若者

3 親鸞と常陸国稲田から高田に入る

(1) 親鸞と稲田

1214年 親鸞、越後から稲田に入る

宇都宮頼綱の招き。親鸞は聖（ひじり）だったか？

(2) 親鸞の門弟は農民か？

『親鸞上人門侶交名牒』

親鸞上人——真仏（下野国高田住）。〈付弟〉——顕智（上人面授）

4 親鸞、高田に入る

(1) 親鸞、稲田から高田に入る

1225年。『教行信証』執筆の翌年。親鸞 53歳。

(2) 親鸞と明星天子

① 明けの明星

② 高田の三宮神社

神体：虚空蔵菩薩

(3) 大内氏の菩提寺

「専修寺」という名称の初見は、室町時代の寛正 6 年（1465）。

5 親鸞と真仏

親鸞書状真仏宛て、1 月 9 日付

（前略）この十四日の夜、焼亡に遭うて候う。この御坊、よくよく尋ね候て候うなり。心ざしありがたきように候ぞ。さだめてこのようは、申され候わんずらん、よくよく聞かせたまうべく候う。なにごともなにごとも忙しさに詳しう申さず候う。あなかしこ。

〈現代語訳〉この十四日の夜、火事にあってしまいました。この人（円仏坊）は大変心配してくださいました。お気持ちはとてもうれしかったです。きっと火事の子細を伝えてくださるでしょう。いろいろお聞きください。いまとても忙しいので、私からは詳しくは申し上げません。敬具

十二月十五日

（花押）

真仏御坊へ

6 親鸞と顕智

顕智書写、正嘉 2 年 12 月、親鸞の話を聞いての聞き書き

自然というのは、自はおのづからという。行者のはからひにあらず、しからしむということばなり。然というのは、しからしむという言葉、行者のはからひにあらず、如来の誓いにてあるがゆえに。法爾というのは、この如来の御誓いなるがゆえに、しからしむるを法爾という。

〈現代語訳〉自然とは、自とは自然にという意味です。修行者の判断ではなく、そうなるという言葉です。然とは、そうなるという意味で、修行者の意図したことではなく、阿弥陀如来の人々を救おうという誓いの結果、そうなるのです。（中略）法爾とは、この阿弥陀仏の御誓いであるので、全部修行者の意図はまったくなく、あるがままの力で、そのようになることを法爾といいます。

7 阿弥陀如来立像と一光三尊像

(1) 阿弥陀如来立像 専修寺対面所の仏間安置

説法印、像高 137 センチ。鎌倉時代末期制作と推定される。

(2) 一光三尊仏像

善光寺三尊形式。関東への実質的広まりは 1220 年代の後半。

おわりに